

2020年度 活動報告書



みずしま滞在型環境学習コンソーシアム

目 次

報告書の発刊に当たって（巻言）	1
-----------------	---

1. 事業内容

（1）環境学習ツアーの実践	2
①岡山大学実践型社会連携授業（2020 年 9 月 17 日－19 日）	2
②Park(ing)Day 倉敷の実施（2020 年 9 月 18 日）	4
③「水島フィールドワーク 瀬戸内海で学ぶ、産業と暮らしと環境」（2020 年 9 月 20 日）	6
④岡山県立岡山城東高等学校の受け入れ（2021 年 3 月 3 日）	8
⑤海岸生きものの調査（倉敷古城池との連携）（2021 年 3 月 27 日）	9

（2）地域づくりの取り組み	10
①第 10 回水島学講座（歴史編）「みずしまの歴史を知ろう」（2020 年 11 月 14 日）	10

（3）地域連携、広報の取り組み	11
①オンライン体制づくりと実践	11
②シンポジウム「若者と企業と一緒に、持続可能な地域の未来を描く」（2021 年 2 月 27 日）	12

（4）情報発信	
①ホームページの整備	23

2. 今後の展望	24
----------	----

資料 みずしま滞在型環境学習コンソーシアムについて	25
---------------------------	----

みずしま滞在型環境学習コンソーシアム
会長 萩原 邦章

持続可能な地域づくりを担う人材育成を目的に「みずしま滞在型環境学習コンソーシアム」を2018年3月に立ち上げ、3年が過ぎました。これまで順調に進んできており、これまで以下のことに取り組んできました。

1. モデルツアーや研修受入の実施
2. 地元の高校と連携した学びと地域活性化に向けた取り組み
3. 地域の団体と連携したまちづくりや、未利用空間の活用（Park(ing)Day 倉敷と連携）にむけた取り組み
4. 地域に育つ子どもたち（小中学生）向けの授業プログラム作り など

今年度は、新型コロナウイルスの影響で研修受入は、大幅に制限を受けましたが、その中でも、オンラインを取り入れた学びの体制づくりにより、水島学講座「歴史編」や、高校生流域交流会などに取り組むことができました。

今後、これらの取り組みを発展させ、持続可能な地域づくりを実現するためにも、企業と連携した取り組みを進めること、そして次世代を担う高校生や大学生といった若者の地域での学びを支える仕組みづくりが重要になってくると考えています。

着実に歩みは進んでいると思いますので、皆様のご協力をいただきながら、歩みをより強固なものにしていきたいと考えていますので、引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

1. 事業内容

(1) 環境学習ツアーの実践

①岡山大学実践型社会連携授業（2020年9月17日～19日）

みずしま財団 塩飽敏史

9月17日（木）～19日（土）の3日間、水島商店街をフィールドに「まちづくり」をテーマに学ぶ岡山大学実践型社会連携授業（担当：岩淵泰准教授）を実施しました。今年度は、新型コロナウイルス感染防止対策のため、参加者を制限し、参加した学生は、6名でした。

大気汚染公害を経験した水島地域では、環境に配慮した上でにぎわいのある、人々が住み続けたいと思えるまちづくりを目指した取り組みが進められています。昨年度（2019年度）に引き続き、「ミズシマ・パークマネジメント・ラボラトリー（以下：MPMラボ）」が主催する「Park(ing)Day 倉敷」に参加することで地域の方と交流し、まちづくりのあり方などについて実践的に学ぶことを目的としました。

1日目は、岡山大学での座学で、水島の公害経験とその教訓を未来に活かす活動と水島でのまちづくりの取り組みについて基礎的な情報を学びました。その後、18日に実施される「Park(ing)Day 倉敷」について学びました。

2日目は、実際に水島に移動し、Park(ing)Day 倉敷の主催者である MPM ラボの関係者と交流をしながら、会場設営の段階から参加し、本番では地域の参加者との交流を行いました。

3日目は、古川明氏の案内で水島商店街を散策した後、振り返りとしてまちづくりの課題などについて話し合いました。

9月17日（木） 全体進行：岩淵泰准教授（岡山大学 地域総合研究センター）

9:00～12:00 レクチャー「水島の発達史 ～地域開発、公害から環境へ～」

講師：塩飽敏史（みずしま財団）

12:00～13:00 昼食

13:00～14:30 レクチャー「水島商店街の歴史とまちづくりの現状」

講師：古川明氏（MPM ラボ）

15:00～16:00 レクチャー「Park(ing)Day 倉敷について」

講師：古川明氏

9月18日（金）

9:00 岡山大学を出発

10:00～17:00 MPM ラボのメンバーと顔合わせ、準備

17:00～20:00 Park(ing)Day 倉敷

・水島おかみさん会との交流

セレクトン倉敷水島に宿泊

9月19日（土）

9:00～10:00 まち歩き（解説：古川明氏）

10:00～11:00 全体の振り返り作業、解散



古川明氏によるレクチャーの様子



水島おかみさん会との交流

【学生レポートより】

- ・ 会場には幅広い世代の参加者がいて、ゲームをしたり、人工芝の上に座り談笑したり、Park(ing)Dayが終わった後でも残って話を続けている人がいたりして、まさしく「憩いの場」ができていた。現在においてこのような場所は「非日常的」なものと感じられるが、様々な場所に今回の会場のような場所が設置できればそれが「日常的」なものとなり、日常の中に憩いの場が当たり前にあるという生活が作れるのではないだろうか。
- ・ 水島の人たちには「水島をもっと良い場所に」という思いと、それを行動に移すだけの力があることに気づくことができた。水島に住む人には力がある、と感じられた。これだけの条件が揃っているのだから、水島が今よりも活気のある場所になるときも、そう遠くはないだろう。そう思うことのできる気づきを、今回の講義で与えてもらった。
- ・ Park(ing)Day 倉敷で気づいたことは、水島は都会のような街ではない分、地域のコミュニティを大切にしているということだ。作業の時間中に地域の方が通りすがりの方と普通に話しているのを見かけた。街中ではなかなか見ないものと思った。
- ・ ユニークに感じた点は、Park(ing)Day 倉敷をイベントとして考えるというよりかは、話し合えるパブリックスペースをつくることに目的を置いていたところだ。
- ・ Park(ing)Day は、何もないところから活気のある場所へと変化している様子は、他の人口減少が起きている町も参考になるようなイベントだと私は感じました。

【まとめ】

本授業では、若者が「Park(ing)Day 倉敷」に参加し、地域の隠れた資源を発掘することを目的にしました。Park(ing)Dayでは、パブリックスペースを活用したまちづくりの哲学を学びました。そして、設営の段階から地域の方と一緒に汗をかき、作業することでより深く交流を行うことができました。

おかみさんの会による商店街の話は、水島がどのような場所であったのかを思い出させてくれ、キャンパス内の学びでは得られない地域の思いを実践的に学ぶことができました。

授業の工夫は、多彩な講師陣が、過去から未来までの歩みを整理し、参加学生にSDGsを基にして提言を書かせたことです。地域の思いを感じながら、水島が好きになる充実したプログラムになりました。



水島の歴史を紹介したパネル



まち歩きの様子



振り返りの様子

②Park(ing)Day 倉敷の実施（2020 年 9 月 18 日）

ミズシマ・パークマネジメント・Lab 代表理事 古川 明
(みずしま滞在型学習コンソーシアム 副会長)

一昨年、米国ポートランド市公園局から、来日中のジョニー・フェインさんからヒントを得て実施した Park(ing)Day。

昨年は、9 月 18 日に「ミズシマ・パークマネジメント・Lab（以下、MPMラボ）」主催の下、一般社団法人ソトノバ・スタジオと連携しながら、全国 6 都市で、同時開催することになりました。（その他国内の開催都市は、横浜市、八千代市、四日市市、長浜市、竹原市）

Park(ing)Day と一口に言っても、開催するまでの道のりは、かなりハードなものでした。7 月初の参加メンバー募集を皮切りに、ソトノバと度重なる情報共有を図りながら、8 月 22 日には、Park(ing)Day の前段として重要な位置づけとなる、まちの特徴を精査する「Place Game」を開催。その翌週、1 Day シャレットと称するまちのビジョンを描く作業をこ



エントランスボード作成中の学生

なした後、約 1 月をかけて、分析結果を確認しながら、まちの魅力や価値を如何に向上させていくか議論を重ねた上で、Park(ing)Day 当日に表現（実践）する内容を決定し、当日を迎えるに至りました。

朝 10 時からスタートした会場づくりは、準備段階から参加してくれた米子在住のデザイナー、広島のみちづくりの専門家 2 人の協力の下、事前に練り上げた企画案に沿って進められました。会場となったアスファルト敷きの空き地スペースは、ボランティア参加してくださったまちの工務店や一般市民の方、大学の講義の一環として参加してくれた岡山大学の学生諸君などの協力もあって、みるみる素敵な空間に変貌を遂げました。

今回、Park(ing)Day で設定したテーマは「ミズシマ PALLETT」。そのコンセプトは、水島の過去・現在・未来を繋ぎ、お年寄りからお子さんまで、参加者ひとり一人に水島のことを肌で感じてもらうというものでした。

会が始まると、緑がほどよく配置され、ターフをお洒落に張巡らせた心地良い空間の下、かつて賑やかだった頃の水島の写真展示の前では、当時の状況を説明して下さるおかみさん会の皆さんの生き活きとした笑顔や、その説明に熱心に耳を傾ける高校・大学生の真剣な姿が、とても印象的でした。また、親子で参加して下さった方々に用意された、モルックやオセロゲーム、チョークアートで遊ぶ子供たちの楽しそうな姿も、Park(ing)Day に華を添えてくれました。

MPMラボでは、今回の成功体験をバネに、引き続き、居心地の良い空間『まちのリビングづくり』を意識した、まちに日常的な賑わいを取り



ポスター

戻す活動を進めて行こうと思っています。



ホテルセレクトン 屋上より



会場入り口



先輩から、街づくりについて学ぶ高校生



ターフの下で遊ぶ親子



昔の写真を感慨深げに眺める街の人

9 月 20 日(日)岡山大学大学院環境生命科学研究科で研修中のアフガニスタン研修員 3 名が、倉敷市水島でフィールドワークを行いました。

今回は「世界一の環境学習のまち“みずしま”の創造」をめざす「みずしま滞在型環境学習コンソーシアム」のアレンジによる、同地区での産業・暮らし・環境保護及び地域振興政策について、講義や見学を通じて学ぶプログラムです。

参加研修員は全員、来日後 1 年以上が過ぎているため、既に各々が大学の学生寮やアパートで暮らしています。そのため、JR 岡山駅改札口での集合となりました。時間通りに集合した研修員は、最初に検温。マスクをして、バスの中では、なるべく離れた座席に着席。最初の目的地である「水島展望台」に向け出発です。

展望台では当日の全行程ご同行いただいた(公財)水島地域環境再生財団(みずしま財団)理事・研究員 塩飽敏史氏から、江戸時代から続く水島の干拓、埋め立ての歴史と共に、コンビナートと住宅地、農耕地が隣接している水島の特徴、また、北と東側を山に囲まれ、南西側が海に面しているため、海側からの風により、工場からの有害物質を含む排煙が滞留しやすい地形的特徴を踏まえ、地域開発と公害の歴史についてレクチャーを受けました。



【水島展望台からコンビナートを臨む】

【「木村式自然栽培によるお米作り」を学ぶ】

次に一行は、「ミズシマ・パークマネジメント・Lab」にて、NPO 法人岡山県木村式自然栽培実行委員会事務局長 田辺綾子氏から、水島地区で行われている木村式自然栽培による米作りについて、ご説明いただきました。

水島地区では、戦後のコンビナートの成立以降、兼業農家による肥料や農薬を使用した効率的なコメ作りが進んできた背景があります。しかしなが、農家の高齢化などにより、農業のあり方が見直される中で、木村式自然栽培実行委員会では、安心安全なコメ作りとして自然栽培の普及に取り組んでいるとのこと。

木村式自然栽培は外部から化学肥料、合成農薬、除草剤などの資材を投入せず、自然が持っている力を最大限引き出して栽培を行う農業です。自然に任せて放置するだけではなく、土中の微生物も含め田畑を豊かな自然環境の状態に近づけて「作物が生育しやすいように人間がお手伝いをする」栽培方法であるとのこと。



【通訳を介して説明を聞く研修員】

研修員は 3 人全員が農業を学んでいることもあり、「米以外の作物での適用方法」や「アフガニスタンの様な比較的乾燥した土地での適用方法」等、質問が相次ぎました。

【児島観光港から、瀬戸内海周遊】

その後、昼食をはさんで、児島観光港から瀬戸大橋周遊観光船に乗りました。瀬戸大橋の下を通り抜け、与島の手前まで行き、児島観光港に戻る約 45 分間のクルーズです。

船上では瀬戸内海の大小の島々や工業地帯を眺めながら、塩飽敏史氏から過去の開発による水質悪化の問題、政府の規制強化により水質が改善した経緯、また、水質改善後も続く水産業の衰退について、ご説明いただきました。

ちなみに、この海域は有名なタコの漁場でもあり、遊覧船乗り場の売店では大きな干しタコも売られていましたが、タコを食べる習慣がない研修員にとっては、不思議な商品なようで、「タコを食べる日本人はすごい！」と日本語でつぶやいていました。



【遊覧船上にて】

【「むかし下津井回船問屋」でタイムスリップ】

児島半島の先端に開かれた下津井は古くから風待ち・潮待ちの港として発展して来た地域です。特に明治時代には、北前船による綿花、ニシン粕、昆布の中継取引港として大いに繁栄したとのこと。「むかし下津井回船問屋」は、当時の回船問屋の建物を復元した資料館です。

資料館内は江戸から明治時代にかけての商家の店の間、茶の間、台所等が当時の家具と共に復元されており、研修員達は海とともに生きた人々の生活を学びながら、昔の日本への束の間のタイムスリップを楽しみました。



【むかし下津井回船問屋見学】

【フィールドワークを終えて】

「水島の経験を活かしてください。SDGs（「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の達成のためには、誰一人取り残される人がいないことが大切です。」塩飽敏史氏の言葉です。

工業化が急速に進展した当時、水島では気象条件、地理的条件によって、公害の発生も予測可能だったとのこと。しかしながら、経済発展優先の当時の考え方の中では、人々の健康への配慮は顧みられず、多くの公害患者が発生して人々が苦しい思いをすることになりました。また同時に、企業も裁判や補償費の負担など、きちんと対策をしていけば払わなくて済んだ負担を負うことになりました。

今回のフィールドワークでは経済発展が人々の生活を豊かにし、社会を支えてきた側面と、大気汚染公害が発生させ、健康に影響を与えたという負の側面の両方を学ぶことが出来ました。参加した研修員は全員アフガニスタンの農業行政に携わっています。今回のフィールドワークは帰国後の研修員各々の業務に新たな大きなヒントを与えたものと考えます。最後になりましたが、ご指導いただいた皆様にあらためて御礼申し上げます。

④岡山県立岡山城東高等学校の受け入れ（2021年3月3日）

みずしま財団 藤原園子

2021年3月3日（水）に岡山県立岡山城東高校2年生32名が、水島研修を行いました。今回水島を訪れたのは人文社会学類『国際理解』受講生です。海外研修などが新型コロナウイルス感染拡大により中止となってしまう、岡山県内での研修実施について担当の先生から相談がありました。今回、みずしま滞在型環境学習コンソーシアムのプログラムで研修することとなりました。

【実施内容】

テーマを「倉敷市水島から学ぶ地域社会と環境」とし、半日コースで、水島フィールドワークを行いました。

【講師】

中尾優氏（倉敷市）

古川明氏（ミズシマ・パークマネジメント・Lab）

塩飽敏史（みずしま財団）



【当日の様子】

*水島愛あいサロンコミュニティフロアにてレクチャー（9：30～10：15）

レクチャー「水島の地域開発と公害発生の歴史」（みずしま財団 塩飽敏史）

- ・ 地域開発による海の変化・まちの変化 大気汚染、農作物の被害、健康被害
- ・ 公害をなくすために、企業・行政・住民それぞれの立場でどのような取り組みをしたか？

レクチャー 倉敷市の大気環境を監視するしくみ（倉敷市環境監視センター 中尾優氏）

- ・ 現在は環境を守るためにどんなことをしているのか

レクチャー SDGs 2030年こうなったらいいな（みずしま財団 塩飽敏史）

- ・ 過去の人々の思いを受け継いで、未来につなげる
- ・ 過去を学び合うことで未来をつくる。

移動

*水島のまち歩きと、レクチャー（2グループに分かれる）

- ・ 「まちづくりの現場を歩く」と、「リノベーション物件で話を聞く」を交互に体験
- ・ ニシナ本店空き地活用、公園の魅力化
- ・ 水島コンビナート企業 OB のまちづくりに関わり
- ・ 商店街の協力店で、お土産を買ってもらう（協力店：ミルクラウン、清正堂）
- ・ 空き地を緑でいっぱいに？！ミズシマ・パークマネジメント・Lab の試み
- ・ 高校生とまちづくり



【まとめ】

新型コロナウイルス感染拡大を予防するために修学旅行が県内研修となった高校生に、学びの機会を提供することが出来ました。高校生たちは地域の歴史やまちあるきで現状を見聞きするなかで、産業と環境の共存、持続可能なまちづくりなどへ興味関心を広げるきっかけを得ていました。

2021 年 3 月 27 日土曜日、倉敷市児島通生海岸にて、倉敷古城池高校の生物園芸部・科学部を中心に海岸調査に興味のある高校生 18 名が参加し、海岸調査を実施しました。理系分野の高校生がフィールドでの学ぶ体験を水島で実施できること、さらに、今後滞在型環境学習を進めていく際の体験活動のプログラムの可能性を検討することを目的としました。

【実施内容】

コンソーシアムとして、生物調査に 3 名、漂着ごみ調査に 1 名、合計 4 名を講師として派遣しました。調査項目は生物調査と漂着ごみ調査です。調査場所は、倉敷市通生海岸は水島と児島の間にある海岸です。

【講師】

洲脇 清氏（倉敷の自然を守る会会長、倉敷市生物多様性審議会委員）

坂本 明弘氏（倉敷市自然史博物館幹事）

田賀 辰也氏（インタープリター、岡山県自然保護推進員）

塩飽 敏史（（公財）みずしま財団理事・研究員）

【当日の調査の様子】

潮だまりチーム、干潟チーム、海ごみチームの 3 チームに分かれて実施しました。下記の調査結果が得られました。

- ・ 潮だまりチーム：マツバガイ（下写真）、ナミマガシワ、オオヘビガイ、ケヤリムシの一種、ケハダヒザラガイ、アラレタマキビ、タマキビ、マルウズラタマキビ、アカクラゲ、タテジマイソギンチャク、イソガニ、ヒライソガニ、マガキ、ケガキ、ミズハゼ、ヨメガカサ、ウノアシ、アオガイ、ヨロイイソギンチャク、ホンヤドカリ、ユビナガホンヤドカリ
- ・ 干潟チーム：ナマコ、ツバサゴカイ、アナジャコ、タマシキゴカイのフン、テッポウエビの一種、ウミニナ、ホソウミニナ、アラムシロ、ユビナガホンヤドカリ
- ・ 海ごみチーム：10m四方で区切った場所を決めて、砂浜で調査。タバコの吸い殻が 39、シートの破片 21 等（環境省の RDB ではウミニナは準絶滅危惧種、ツバサゴカイは絶滅危惧Ⅱ類です）

【まとめ】

参加した高校生は 9 割が 1 年生で、海岸調査の経験者はほとんどおらず、専門家に直接指導を受けながら生物への関心が高まっていた様子が見られました。高校生が自分たちの高校の近くにある自然の状態を自分自身で調査できるよう今回支援したことで、高校生が地域への愛着を持つきっかけになることが期待できます。今回 18 名と多い人数であったため、指導や安全管理にコンソーシアムが協力してくれたことがありがたかったと引率教された先生から感想がありました。



(2) 地域づくりの取り組み

①第 10 回水島学講座（歴史編）「みずしまの歴史を知ろう ～46 年前の三菱石油重油流出事故の経験に学ぶ～」(2020 年 11 月 14 日)

みずしま財団 塩飽敏史

水島について学び、水島の学びを支える人材育成を目指した水島学講座（歴史編）の第 10 回目となる講座を 11 月 14 日（土）、開催しました。

今回は、講師に古川明さんをお迎えし、46 年前の三菱石油重油流出事故の当時の様子や、回収作業でご苦労されたことなど詳細にお話しいただきました。

1974 年 12 月 18 日に発生した重油流出事故では、大量の重油が瀬戸内海に流出し、遠くは淡路島に達するほどでした。被害総額は 500 億円とも言われ、その回収には漁業関係者や消防署員、自衛隊、企業関係者など多くの人が関わっても 1 年以上かかりました。

古川さんは、入社 1 年目でしたが、水島出身ということもあり、現場に入り、油回収用の資材の調達などに奔走される中で、このような事故を二度と起こしてはいけないという思いを強く持たれたそうです。

そして、その教訓は、宮城や東京湾での同様の事故に際して活かされることになりました。その詳細と、その後に起きた湾岸戦争後のペルシャ湾での活動も含めて、お話いただき、経験を活かすことの大切さを、具体例を通して学ぶことができました。最後に、古川さんから、「経験は必ず生きる」「訓練以上のことはできない」といった教訓をもとに、防災意識の向上を呼び掛け、締めくくられました。

本講座は、初めてオンライン形式での開催ということで、上手くいくか不安もありましたが、無事実施することができました。オンライン参加 8 名、会場参加 3 名で、講義の後の質疑応答では、皆さん熱心に意見交流を行われました。



ペルシャ湾での活動の様子を伝える



オンライン配信の様子

（３）地域連携、広報の取り組み

①オンライン体制づくりと実践

報告：みずしま財団 塩飽敏史

【オンライン体制づくり】

2020年度は、新型コロナウイルスの影響を全世界が被った年となりました。その影響は、当コンソーシアムも同様で、大学等の研修受入や、モデルツアーを中止せざるを得ない事態となりました。そうした中で、何かできることはないかと検討した結果、オンラインを活用することで講座の配信等、学びの取り組みを継続することとしました。

オンラインの体制づくりにあたり、一般社団法人高梁川プレゼンターレ（代表理事：坂ノ上博史氏）に協力いただきました。内容は、機材の確保とコンソーシアムスタッフへのオンライン配信のやり方について、レクチャーいただきました。

2020年度は、当コンソーシアムの主催、協力合わせて3件の事業でオンライン配信を行いました。

オンラインを活用した講座等の開催により、これまで参加の難しかった高梁川上流域を含めた人々との交流も可能となりました。今後は、一層活用の幅を広げることで、高梁川流域の若者の学びを支える体制づくりを進めていきたいと思っています。

2020年10月2日（金） オンライン配信についてのレクチャー

11月14日（土） 第10回水島学講座「歴史編」

（主催：みずしま滞在型環境学習コンソーシアム）

2021年1月16日（土） 「高梁川とその支流をつなぐ高校生流域交流会」

（主催：油木高校神ゼミ、（公財）水島地域環境再生財団

協力：みずしま滞在型環境学習コンソーシアム）

2月27日（土） シンポジウム「若者と企業と一緒に、持続可能な地域の未来を描く」

（主催：みずしま滞在型環境学習コンソーシアム）



オンライン機材



高校生流域交流会の様子（2021/1/16）

【場 所】 たびのホテル倉敷水島 大会議室 (倉敷市水島西常盤町 4-25、電話 086-444-2190)

【参加者】 50 名 (オンライン参加 16 名含む)

【プログラム】

開会あいさつ：古川明氏 (みずしま滞在型環境学習コンソーシアム副会長)

西雅敏氏 (倉敷市企画財政局長)

特別講演 未来につなげる SDGs とビジネス～広島における SDGs セレクトブック作成を事例に～

講師：松原裕樹氏 (EPO ちゅうごく事務局長、NPO 法人ひろしま NPO センター専務理事)

沖本晴香氏 (安田女子大学)

報告 みんなで作り、みんなで使う地域学の教科書 ～高梁川流域の学びの可能性～

講師：前田芳男氏 (岡山大学地域総合研究センター副センター長)

パネルディスカッション「コロナ禍の今、地域での学び合いを考える」

コーディネーター：唐澤克樹氏 (倉敷市立短期大学講師)

コメンテーター：松原裕樹氏、前田芳男氏

パネリスト：高木颯太氏、茅野立氏 (岡山県立倉敷古城池高校)

蟻塚そら氏 (岡山大学)

沖本晴香氏 (安田女子大学)

閉会あいさつ：尾崎浩子氏 (みずしま滞在型環境学習コンソーシアム)

主催 みずしま滞在型環境学習コンソーシアム

協力 中国環境パートナーシップオフィス、中国地方 ESD 活動支援センター

後援 SDGs ネットワークおかやま

【特別公演】

未来につなげる SDGs とビジネス ～広島における SDGs セレクトブック作成を事例に～

EPO ちゅうごく事務局長 松原裕樹・安田女子大学 沖本晴香

松原：SDGs は企業や行政、学校などいろいろなところで取り組まれている。社会・環境・経済のバランスをとり、その土台に教育があることが重要となっている。中国地方でも 9 つの SDGs 未来都市があり、倉敷市もその一つ。広島県と EPO ちゅうごくが協力して「SDGs セレクトブック」を作成した。広島県は「平和」の実現を目指して、EPO ちゅうごくは第 5 次環境基本計画の実現のために SDGs の推進と担い手の育成を目指してこの事業が始まった。具体的には学生が企業に取材に行って、セレクトブックにして発信した。2018 年は西日本豪雨災害がある中で、勉強会や企業訪問をして取材を重ねて、セレクトブックを作成した。世界経済人会議でのお披露目や、企業人と学生と一緒にふりかえりを行った。2018 年度は企業 26 社と大学生 33 名の参加、2019 年度は企業 29 社と大学生 16 名の参加となった。参加した企業の感想とし



て、企業として学生に企業を知ってもらうことになったとか、インタビューの中で企業の SDGs の取り組みを整理できたというものがあつた。

2021 年度は新型コロナウイルスの影響があつたので、新型コロナウイルスの影響を受けている中で SDGs を考えてもらうことで企業募集をかけた。オンラインを使ったりしながらのハイブリット対応となったが、3 年目の取りまとめの年なので大学生アイデア意見交換会や大学生対談企画なども行った。

沖本：現代ビジネス学科で学んでいる。先生の紹介でプロジェクトを知った。SDGs を学ぶきっかけになると思って参加を決めた。2019 年には SDGs を聞いたことがない人が 51%もいた。私は 100 年続いている和菓子屋に取材に行った。100 年も続いているという部分に SDGs のヒントがあるのではないかと思った。そこでは、新型コロナウイルスの対応の中で、おうちで作れる和菓子キットの販売やお菓子味来チケットの販売を行っていた。味来チケットの収益の一部は子ども食堂への寄付となっている。社長へのインタビューの中で、「お客様のために」「従業員のために」というフレーズが沢山出てきて、相手本位の姿勢が SDGs の実現につながるのではないかと考えた。また、地元テレビ局への取材でテレビ CM で SDGs の発信や、コロナ禍でアーカイブズの充実を進めていた。「信頼のおける情報を発信する」ことに重点を置いていることがわかった。SDGs を浸透させるためにはいろんな人が発信することが大切だと考えた。意見交換会にて環境省と県庁と学生のパネルディスカッションがあり、その中で「あなたの考える SDGs のゴールは？」という問いがあり、私の中では 2030 年でゴールがきて終わりというイメージがあつたが、持続可能はそこで終わりでない気がつき、持続可能が当たり前の価値観になっていることが大切だと考えた。周りの人に少しずつでも伝えていくことが大切だと思った。若い世代が未来を作っていくのだから横のつながりを作って、変えていくことが大切。自分でできることとして「Necom. SDGs」という学生チームを作って、勉強会などの活動を進めている。自分ごととしてとらえるためにどうすれば良いのかと考えたときに、体験学習が必要だと気がついたが、だから県がこのプロジェクトをしたということに気がついた。様々な方に出会って、考えることができて、次のアクションにつながった。SDGs を自分ごとにしてできる人が増えて欲しいと願っている。ひとりひとりができることから始めていけば実現できるのではと考えている。



松原：1980 年代からサステイナブルという言葉が広まり始まったが、大切なのは「将来世代」にニーズを満たす能力を損なうことなくということが大切なこと。次世代のニーズに応えるために選択肢を増やすことが大事だと考えている。三年間の成果は、成果の可視化と発信する中で、地域の魅力や大学生の就職にもつながっていった。他県でも取り組みたいという希望や、マルチステークホルダーの実現などが挙げられる。その先での波及効果として企業の SDGs の取り組みが加速している。例えば税理士事務所でも取り組みを SDGs として可視化したり、SDGs の交流会が始まったり、日常的に取り組みが起きている。倉敷でも真似して取り組んでもらえたらと願っている。一つの組織で SDGs を行うのは持続可能性として難しいので、自助・共助・公助が必要ではないかと考えている。よそ者・バカ者・若者（プラチナ世代）がどう関わっていくかがポイントだと思う。立場を超えて、世代を超えてパートナーシップを作っていくことが大切だと思う。環境も貧困も災害も、同時進行でつながって取り組む。そして正解がないで、みんなで取り組みながら楽しみながら行動することがポイントではないかと考えている。

【報告】

水島地域・高梁川流域で持続可能な社会を学ぶ

前田芳男（岡山大学地域総合研究センター副センター長 教授）

私は、岡山大学で「実践型社会連携教育」を担当しています。これは、その名の通り学生が教室を飛び出し、地域社会の実際の課題に触れ、住民、企業やNPOなどと一緒に活動しながら学ぶタイプの授業です。高校では地域探究学習などと言われ、私も県内のいくつかの高校の授業に協力させてもらっています。ここでは、その経験から、新しい学びの場としての水島地域の可能性についてふれたいと思います。

50年の時間軸で持続可能な社会を考える

今、高校でも大学でもSDGs（持続可能な開発目標）が注目されていますが、水島地域、そして高梁川で結ばれた流域全体は、全国的に見てもその学びに最もふさわしい場所のひとつです。

ここに示した絵は、私の郷里にある大分駅の1960年頃のホームの様子を描いたものです。金の卵と言われた若者が集団就職で故郷を離れる場面で、1970年頃、私が小学3年か4年のときに先生が授業で使った教材です。当時は、全国で同じような別れの場面がありました。この若者たちの故郷では、まだ手植えの田植えが行われたいたはずですが、おそらく就職列車の若者の一部、そして、その後も高梁川流域や全国から若者が水島に集まり、日本屈指の工業都市が形成されていきました。この間水島では商店街の賑わいや公害を経験し、同じ時期上流域では人口流出が続き、それが今の中山間地が抱える諸問題につながっていきます。農村部の人口減少・高齢化の問題は、既に50年前に勝負がついていたことなのでしょう。すべては密接につながっています。

過疎化などの問題はあっても、今岡山の地に暮らす私たちは、総じて幸せな暮らしを享受していると言えます。私たちは一生懸命頑張ってこの暮らしを手に入れ、開発途上国の人々は、日本と同じように豊かで安定した暮らしを求めて一生懸命頑張っていて、その変化は目覚ましいものがあります。しかし、77億人の人類が皆同じようにしたら地球がもたないというのが、SDGs達成が不可避となった今の状況です。では、どうすればいいのか。解決策のヒントは、これまでの50年を振り返ることで見出せるはずです。そして、この50年に何があったのか、今生きている人から生の声を聞き、現場を見ることができると、水島地域であり高梁川流域です。



最先端の環境技術から里山の暮らしまで

岡山大学の授業では、学生たちが、コンビナート企業で最先端の装置による環境技術を見せてもらったり、商品のグローバル展開の戦略提案の機会を与えてもらったりしています。商店街では、老舗のおかみさんから昭和40年代の商店街の賑わいやその後の衰退の話を聞くことができました。社宅の跡も見学しました。公害については漁業者や患者から直接聞くことができました。最近では、Park(ing)Dayなど地

域活性化の新しい活動にも参加させてもらっています。県北では、林業の間伐ボランティアをしたり、「聞き書き」を行いました。聞き書は、地域の高齢者などに会い、その方の半生を聞かせてもらう活動です。1年生の女子学生が、80代の林業のおじいさんに聞き書きをしたことがあります。その時おじいさんは、「今自分が伐り出している木は、昔の誰かが植え守ってきたもので、今植えた苗は、何十年か先の子孫が伐り出してお金に換える。誰がいつその木を伐るかは分からないけれど、先人がしてくれたのと同じように今、下草刈りをし、枝切りをするのが山の仕事だ」と言いました。「山に行くのはやっぱり楽しい。手入れをした木はすくすく大きくなっていく。大きな木になるまで何とか生き続けて手入れをしてやらないといけないと思うところもある。」とも言いました。学生と一緒にこの話聞いて、私は衝撃を受けました。こんなにも堂々と50年先のことを言える人に会ったことがないからです。高校でも大学でも、SDGsを標榜しながら教員が生徒に言うことは、いい大学にいけ、いい企業入れと、せいぜい2、3年先のことです。おじいさんの山への作法、畏敬の念のようなことを地球規模で考えていくことが持続可能な社会づくりにほかなりませんが、このような体験的学びは教室では決してできません。でも、水島地域や高梁川流域ではできるのです。

水島で学んだ先に

さて、先の絵を見せながら先生は、「柱の陰のおじいさんは誰で、なぜ悲しい顔をしているのでしょうか」と私たちに質問しました。「孫を見送りにきた人」などいくつかの答が出ましたが、小学生の私は、「この人は大分県知事だ」と答えたのを覚えています。「若者が大分を離れていくのをなんとか食い止めなければと思っている顔だ」と思った体験があったから、私は今の地域づくりの仕事に就いているのだと思うのです。地域で学んだ経験は、必ずその人の将来に何がしか影響します。若い時に地域でしっかり学んだ人は、将来きっと世界のどこかで同じ感覚を持つ人とつながり、持続可能な社会づくりを進めていってくれると思うのです。



【パネルディスカッション】

唐澤：皆さんの地域での学びや活動について伺います。大学や高校の授業での教室での授業は理論が中心となります。理論だけで偏ってしまうと地域の魅力を伝えていこうとか、実は授業を作る側としては非常に大きな課題です。皆さんにお訊ねしたいのは、学校での学びの違い、机の上で勉強することも大事ですけども、一方で地域にでての学びとの違いはありましたか？あるいはそんな中での発見や学びがあれば教えていただけたらと思います。

高木：授業との違いは、教科書に載っていないことを学べるのが地域で学べるってということだと思います。データ裏側、ことの本質は地域に実際に出向かないとこれはわからないものだと思います。自分は「わっしょいと一か一ず」で活動する前までは、まちづくりというのは行政の人たちが先導していて、それに続く形で地域の人達が引っ張っていらっているようなものだと考えていました。活動を通じて地域の人たちが自ら主体的に動いてまちづくりをおこなっていることがわかりました。

茅野：授業としての学びは、必ず答えがある受動的なもので、地域での学びは自発的でなければ、答えどころか答えに対する過程もなく、だからこそ自分から進んで学ぶことができる。発見については、自分は種松山の模型を作ってもものづくりの大切さと、山全体の感覚というものが捕まえることができるようになりました。講演会を通して、作った模型を評価してもらえるとということが嬉しかったです。講演会で地域の人々の会話から色んな考え方があり、年代別に、若い人から年寄りの人から全く意見が違って、そこが面白いという発見がありました。



蟻塚：授業の中での学びは、どうしても受け身になってしまいがちなところがあると思います。授業って学校の中で行われることが多いので、ある程度先生になれる人が決まっているように感じます。それに対して地域での学びは、自分から動かないと学べないことがたくさんあります。こうやって今日ここでなにかお話をさせていただいているのも、声をかけていただいて、それに対して自分が動いたことでまたひとつ経験になりました。地域の学びの中で、人とのつながりや関わりっていうものが凄く大切

だということを実感しました。人とつながる、関わるということがなかなかできないときだったからこそ、人と話すことが楽しいなという自分自身の気づきもありましたし、地域に行って本当は人が温かい場所だっているのを水島で勉強して学んで気づくことができました。授業だと教科書やお手本というものが存在しているけど、地域での学びっていうと「今」というか、流れがある学びだと感じました。

沖本：私は地域での学びは座学での学びと、3つ違うところがあると思います。一つ目が、生きた学びっていうところですが、もちろん座学で理論とかを学ぶっていうインプットするっていうのも大事だと思います。それを実際社会に出て「あ、座学で勉強したことがこういうことだったのか」とわかるアウトプットの場だと思っています。そういう意味での生きた学びっていうこと。二つ目が、思いが学べることです。人の思いが学べるって大きいと思っていて、地域の方と実際にお話しすることで、私が感じたのは目の前で話してくれるので、思いがひしひしと伝わってくるのです。それを聞くことで「あ、これは自分たちが伝え続けて行かないといけないな」と感じました。三つ目は、当事者意識が生まれるっていうのは大きいポイントだと思っています。目の前で実際に見てお話を聞くと、自分が何か関わっていきたいなっていう思いが座学に比べると大きく生まれてきます。

唐澤：皆さんの話を伺っていると、地域の人たちに元気づけられたり、一方で地域の中で課題を見つけ出したりしたのだと思います。皆さん共通して一番大きなキーワードは「人」だと、お伺いして思いました。こういった地域の学びの中で皆さんも色んな、こんな楽しかったとか、逆にこれちょっと大変だなとか、こんなことがあった、あんなことがあったとかいろんなエピソードがあると思います。そういったエピソードと、そういう中で最も楽しかったこと、あるいはこれ勉強になったなと思うこと、逆にこれはすごく苦労したな、大変だったなと思うこと、エピソードを交えながらお話したいと思っています。

高木：まず、楽しかったことは、これはPark(ing)Dayというイベントに参した時の話で、ビールを片手に僕たちに話しかけてくれた人がいました。色々活動していくと、こういった親しみがある人や、面白い人達とふれあうことができました。学んでいるというよりか、楽しみながら学ぶという感じがあったので、地域の人とふれあって気さくな人たちと色んな人たちとふれあって楽しかったっていうのがあります。難しかったことは、フリーペーパーを作るにあたって地域の人たちがどういうものを求めているのかを考えるのが難しかったです。みずしま財団さんは地域のまとめ役というかリーダー的な存在だと僕は思っていますが、みずしま財団に「どういうことをしたらいいですか？」って聞いてみたら、水島は環境だとか公害、農業とかのことも取り入れたらいいじゃないのとアドバイスをいただいて、そこで地域の人たちと協力していくことで、問題を解決することができました。

茅野：学びの中で最も楽しかったことは、種松山の模型を作って地域の方々に評価してもらえること、作ったものから色々会話してもらえることがうれしかったです。勉強になったことは、地域の方々と教えあっていくうちに自分の知らないことでも相手は知らない、知識の差があったりだとか、内容に関連す

る難しさがあって、伝える側の大切さを改めて勉強になりました。最も苦勞したことは、作った作品とハザードマップを照らし合わせてみると、なめらかな地域なのに危険になっていて、疑問を考えるのが苦勞しました。

蟻塚：楽しかったことっていうと、大学の中だけでは会えなかった人に会えたことです。Park(ing)Dayの話ですが、地域を良くしたいと思っている人がたくさんいて、そういう人達が動いたことでPark(ing)Dayというイベントがきたとか、そこに人が集まったんだと感じました。その中で苦勞した事は、私は大学の講義以外にも高梁私学という勉強会に参加していましたが、大学の勉強と自分がやりたいと思って大学の外でやることの両立させることが大変だった、苦勞したなって思っています。

沖本：私は楽しかったことは、和菓子屋さん取材に行ったときとか、対談した時とか、学生全員が集まって色々勉強したり、つながりが広がっていく、ご縁がつながっていくっていうのを実感できた時と、SDGsについて色々お話をできた時はすごく楽しくて、和菓子屋さんでも帰り際に和菓子をもらえたりとか、これもつながりがあるから愛され続けているのだなと感じました。思いを聞けることに感動して、楽しかったです。大変だったのは、逆にその思いを他の人たちにつなげていくというのがめちゃくちゃ難しいなと思って、セレクトブック載せられる文字数がめちゃくちゃ少ないので、もっともっと何倍も話してもらったのに、どうやったらぎゅっとまとめてでも伝えられるのか悩みました。つなげていくのは平和とかでも大事だと思いますが、経験した人がいなくなってしまうので、発信する側っていうのは責任をもって伝える役目を果たさないといけないと、難しいところだと思いました。

唐澤：色んな所で色んな経験の中で楽しさとか、一方で困難をこうやって改善したことがお話の中で非常に響いてくるものがあると思いました、僕も色んな所でプレゼンテーションしていて、論文を書く中でどこをどう伝えようかなって非常に悩みどころがあって、どういう雑誌にせよ、論文にせよ、人に伝えるってなかなか難しいです。「齟齬なく」という言葉がありましたが、それは客観的に伝えていくことの問題だと思います。皆さんがそういうところにポイントを絞ってやってこられたとことが、非常にすごいとその一言につきるのですが、皆さんの色んなこういった楽しいこと、苦勞したけど色んな工夫したってことはこれから活かされていくのだと思います。

唐澤：皆さん自身が地域での学びを通じて、いわゆるキャリアデザイン部分でどういう形で、長い目で見たときに、自分自身のキャリアにどう生きていくのか教えていただければと思います。

高木：自分は昔からまちが好きで、物心がついた時にまちづくりしたいなっていう雰囲気を持っていて、まちが好きだから、例えばゲームとかする時もまちづくりゲームをものすごくやっていました。まちづくりゲームって、人口を増やしたり都市規模を大きくすることによってクリアっていうのが正解なのですけど、先ほども話したんですが、Park(ing)Dayっていうものに参加したときに、Park(ing)Dayはものすごく大きなイベントではなく、こじんまりとしたイベントで、自分は昔からまちづくりゲームして、都市規模がでかいとか人口が多いとか、そういったビックなことが全部いいと思っていました。だからPark(ing)Dayのこじんまりとした雰囲気に違和感を感じていました。しかし、陽気な感じで話しかけてくる人とか、岡大生の方とナクロスで遊んだりして、なんかこじんまりしてるのに、すごく居心地がいいなと思いました。自分はまちづくりしたいと思っていたので、次はまちづくり講演会っていうところに参加しました。そのまちづくり講演会で講師の先生がおっしゃっていたのが、まちづくりっていうのは、規模だけじゃなくて、色々コミュニティをつくり、関係性の良いコミュニティをつくるのが大事だよって聞いて、そこでPark(ing)Dayはよいコミュニティ、良い関係性をつくるのに必要なイベントだと思いました。いいまちをつくっていくには、そういった内面的なものも取り入れないといけないのだと思いました。自分は大学で地方創生だとかまちづくりについて学びたいと思っているのですが、内面的な発達も考えながら学んでいきたいと思っています。

茅野：自分は情報系に進みたいと思っているのですが、学びを活かして、コンピューター上でこの山（模型）をデーター化してもっとわかりやすくする、例えば一番上の所をピンさしたら、そこがズームアップされて見えるようにとか、スマートフォンの GPS を使って、例えば種松山に行ったときに写真をかざしてみたら、ここは危険だとわかるようにしたいです。危険個所に見えないけど、スマホをかざすだけで危険だとわかる、そういう所に活かしていきたいなと思っています。

蟻塚：私は大学に入ってから地域で学ぶということをして、自分たちに関わる地域を大事にできる人や、大事にしたいと思える地域であることはすごく大事だと感じました。私は小学校 2 年生の時に水島に引っ越してきましたが、引っ越してきた当初は、以前に住んでいた町が好きでした。大学に入って改めて自分の住む地域、自分が関わっている地域を一回外からみるというか、客観的な目線で見ること、すごいいい場所だなんて思えることに気づきました。だからこの先、就職などの色んなタイミングで、もしかしたら岡山を出ることがあるかもしれないけど、どこに行っても自分が関わる地域を大切にできる、また自分が大切にしたいと思える地域にする、なっていくということを考えたいなと思いました。

沖本：正直言うと迷走中です。一人一人に SDGs を浸透させる必要はあると思っています。私は言い出しっぺになって、渦の中心になって周りを巻き込んで進めていくことが比較的にできるので、どういう仕事をするにしても、やっていけたらいいかなと今は考えています。

【アンケート】

回答数 30 名

<年代>

10 代 10 名、20 代 2 名、30 代 3 名、40 代 6 名、50 代 5 名、60 代 2 名、70 代 1 名、無記名 1 名

<職業>

自営業 3 名、会社員 3 名、大学関係 1 名、行政職員 2 名、NGO/NPO 1 名、企業/行政 OB 2 名、その他（教員、地域温暖化審議委員、市議会議員、高校生、大学生、学生） 12 名、無記名 4 名

<性別>

男性 16 名、女性 13 名、無記名 1 名

<居住地>

倉敷市 21 名、広島市 3 名、広島県源市 1 名、浅口市 1 名、岡山市 1 名、神石高原市 1 名、東広島市 1 名

<シンポジウム全体について>

・とてもよかった 20 名 ・よかった 9 名 ・普通 0 名 ・いまひとつ 0 名

あえて心残りを挙げるとするとこの催しが水島で行われた意味合いを実感できる、あるいは定着させる時間が欲しかった。「滞在型」となぜ銘打ったのかが分かりにくい感じを持ちました。
「若者と企業と一緒に・・・」企業さんはいたのかな？
全体的に聞いて、自主的に進めていくことがいかに重要かを学ぶきっかけになった。
学生さんは頑張っているが、SDGs を知らない年代もある。北長瀬には食品提供する場所がある。倉敷駅に空き部屋が 2 つある。災害ゴミ減量のためにほしいと思う。助け合い精神が必要。
広島の企業の方や学生さん方がとっても意識が高く、また行動も伴っているお話をきいて、自分は何もできていないなと焦りました。行動の大切さをひしひしと感じました。
水島の行動できる人、行動している人の声、言葉をたくさん聞けた。

体験談を話してもらうことは気づきにつながるから良かったと思う。
若い世代からの話が詳しく発信できていた。全体として広島で活動した学生さんと岡山の実践の話がつながり良かったと思う。
高校生、大学生の想いを聞くことができました！これからも良い学ぶをつくるぞー！
今までの日本の取り組みやこれからすべきことが分かりました。
自分の知らないことがたくさん知れてよかった。改めて考えなおすべきことがあったのでこれから考えていきたい。
地域づくりの難しさとともに楽しさが分かった。
今後の活動についての視野が広がった。
新たな学びを得ることが出来た。地域学がただ地域を活性化させるためだけの学びでなくより深いもの知ったから。
いろいろな活動に参加させていただいた中で仲間の胸の内や大学生の声などを直接じっくりと聞く機会はあまりなかったのでとても新鮮で勉強になりました。
地域について知る機会、学ぶ機会はなかなか得られないのでこのようなシンポジウムに参加し、地域について知ることができ貴重な時間だった。
いろいろな立場、年代の方が来られていて「地域」を語れたのが良かったです。
新たな考え方を取り入れられてとても良かった。今後に生かしていきたい。
前田先生のご講義がとても勉強になりました。また、水島のことや水島で活動している高校生の皆さんのことを知れて良かったです。学びが深まる会でした。
貴重な経験ができてよかった。
今年度自分がやってきたことを振り返って考えることができた。「環境学習」という言葉（概念）への理解が深まった気がする。

<特別講演「未来につなげる SDG s とビジネス」について>

・とてもよかった 18 名 ・よかった 9 名 ・普通 1 名 ・いまひとつ 1 名

SDG s のカラフルなリングを胸に「ファッション」として飾っていたビジネスパーソンのこぼれ話が面白かった。裏返して「先生方」を問い直す SDG s の視点を教わった気がします。
その先が大事というキーワードが極めて重要。未来は 1 パターンじゃない。
「out c o m e」波及効果。1 つの取組みが広がっていく、「楽しさ」が伝わるプレゼンでした。
岡山コープで、コアノンロール（牛乳パック、古紙）で作っている、芯が無くて 388 円位で買った金額から 1 円ユニセフに寄付し 10 年位で 1 億以上寄付している。リサイクル品を買うことで寄付をする社会を構築する事は継支援に続なる。
実践型の学びについて知ることができたと思う。学ぶことに満足しないことが大切ですね。
今後も広く SDGs の観点を周知することが必要。必ず良い未来が広がると思う。
これを高梁川流域でやりたい！！
すべての SDGs に対して、まず自分のこととして向き合うことが大切だと分かりました。
SDGs を通して今の時代に必要なものを改めて知ることができた。
SDGs について、今自分ができることについて考える良い機会になった。

SDGsについて実は17個あるということと漠然とした知識しか持っていなかったが、今回のお話を聞いたことでより知識が深まったから。
まだまだSDGsが浸透していない事実を改めて感じました。私たち若い世代がこれからよりいっそう変えていかなくてはならない社会だと思います。
広島県での取り組みを知ることができ良かった。広島・岡山の横のつながりも深くしていきたいと感じた。
企業とSDGsのひもづけをインタビューした事例がとても参考になった。
沖本さんのトークが主体的、自覚的でした。セレクトブックがとても良かった。SDGsに関わる観点を通して企業内や大学生との関係性がみえるところもすばらしいところでした。松原さんのお話をもっとみんなできたいと思いました。
SDGsに動物愛護が含まれてないのは、猫を飼っている身からしても疑問に感じた。また、進学や就職に関しても安易に都会だからとかいう理由で決めずに周りの環境をみていきたいと思う。
改めてSDGs実現のために大切な心構えが確認できた・
SDGsとビジネスをつなげることのイメージがぐっと近づいた。

<報告「みんなで作り、みんなで使う地域学の教科書」について>

・とてもよかった 22名 ・よかった 8名 ・普通 0名 ・いまひとつ 0名

SDGsのゴールが2030年に設定されているあまり、目線が前にばかり向き、それも目先の成果を追う「落とし穴に」気づかされた。高度成長以前の暮らしにSDGs響き合う「懐かしい未来」があることを再認識しました。
前回のシンポジウムでも地域学を学び、その部分を大いに活かせるきっかけとなった。
SDGs、ESDを学ぶためには同じ学びを繰り返さず、新しい考え方を積極的にチャレンジする大切さを学べた。
テンボがよくって分かりやすかった。SDGsを拡散するにはスーパなどで年代別に学習会が必要です。岡大がSDGsの発表をお願いします。
大人がしっかりと責任を果たしたいと思います！
地域を知り、次の世代につづけて残してゆく。
すごくおもしろかったです。「SDGsの何番に当てはまるかを考えるだけでは意味がない」が心にささりました。
水島で環境というと・・・思い込みをこわすことできた。
外から見ることが大切という話が印象的でした。
まず外側から見ることによって具体的な対策方法を見つけられること分かりました。
SDGs、地域学について深く学ぶことができました。
地域学がどのようなものなのか実際にみて聞いて見るのが大切なのがわかった。
集団就職の話がとてもささった。知らなかった事なので今回学べてよかった。
今まで深考えることのなかった地域学について知ることができた。
今までの考えや理念が覆された。はっきりとした口調で分かりやすく少し難しいところもあったが引き込まれた。
SDGsという言葉がひとり歩きしているように感じ、SDGsの本質的な理解が大切であると感じた。
いろいろなとりくみのつながり、過去と未来のつながりやつくっていくべき社会について勉強になった。
ざくざく刺さる内容がたくさんありました。前田先生の授業を受けたい！と思いました。

「これってどう思う？」という問いかけを常にしていきたいと感じた。またつながりを広げていくことが大切だと感じた。
熱い思いが伝わってきました。地域に出て現場を見ることを今後していきたいと思います。
過去→現在→未来の流れを見ながら地域のことを知ることができた。「これってどう思う？」

<パネルディスカッション「コロナ禍の今、地域での学びあいを考える」について>

・とてもよかった 21名 ・よかった 6名 ・普通 1名 ・いまひとつ 0名

10代、20代のまちづくり、地域観にふれられたのが面白かった。若世代から「ふるさと」という言葉が出てこなかったことは「わがさと」意識の表れで心強かった。
若い人たちの考えを聞くことができた。高校生には夢がある。大学生はない！と見えた、思えた、感じがした。ESDの学びが必要かと。
自分らがやってきたことをちゃんとプレゼンできている。新たな発想も生まれてきて、刺激になった。
生徒にとって、とても充実した学びができていると思った。「両立」（普通の学びと探究的な学び）・・・苦勞している。苦勞しなくてよい授業にしていきたい。
学生さんの思いが分かった。SDGsの理解度が必要！17もあって一つ一つあってよく頑張っているなあと、思います。わが子2人も古城池で、長女は岡大大学院に進学しています。
1人1人それぞれが経験を成長にしているなと感動しました。
地域に出て行ったからこそ自分で分かったことが多かったと言われて、一番大切、自分から行動し広島でも水島でも地域の人々とふれあうととても楽しいと感じて学んでもいる。
関わったのはごく一部だったので取り組みの全体がイメージできて古城池生の頑張りがよく感じられた。私は泣きました。一緒に頑張りましょう。
まちとか地域について学生の話を書いて、これからの世代に期待がもてた。
みんなしっかりと自分を持っていてすごい！それぞれ個人的にお話したい。
皆さんが自分たちの町についての過去それを未来につなげていくことを言われていて自分も考えるべきだと思った。
同じ高校生としてあんなに考えることができ、そして発言できているのがすごかった。
個人で体験したことがひしひしと伝わってきた。私もいろいろ経験したいなと思った。
1人1人自分の意見を持って話している姿に感動しました。
高校生と大学生で歳も少し離れているのに地域のために思うことは一緒なのが嬉しかった。
本心がきけてとても良かったです。大学生の声が直接聞けてとてもうれしかった。勉強になりました。
高校生の取り組みや学びに対する気づき、価値観、今後のビジョンなど聞くことができ大変刺激になった。
高校生に語る場をつくっていただきありがとうございました。地域に育てていただいているとしみじみ思いました。
参加させていただきありがとうございました。高校生が自信をもって話せるようになったのは、前田先生や古川さんをはじめ臨鉄の佐々木さん、尾崎さん、財団さんのスタッフの方々が高校生に期待して話を聞いてくださったからです。それ以外にありません。感謝です。古川さん：高校にきて下さった時の古川さんのお話から当事者意識がめばえた大きな転換になったと高木くんから聞いています。
高木さん、茅野さん、蟻塚さん、沖本さんの考え方や意見がとても刺激になりました。この学びを糧に私も更に頑張りたいと思います。

(4) 情報発信

①ホームページの整備

みずしま財団 塩飽敏史

【ホームページの作成】

本コンソーシアムの活動を紹介し、水島での環境学習の活動を広く世間に知ってもらうことを目的に、ホームページの整備を行いました。

ホームページ上では、コンソーシアムの紹介、プログラムの内容に加えて、ブログ形式によりイベント等の案内や活動報告を通じて、情報発信を進めていきたいと思っています。



【マスメディアを通じた発信】

FM くらしき (82.8MHz) 毎週金曜日「週刊くらしき ハッピーレディオ」内のコーナー「みみみずしま財団エコらぼ Friday」(15 時 45 頃から約 15 分) において、本コンソーシアムに関する情報発信を行いました。

シンポジウム (2/27) の様子を地元山陽新聞社に取り上げられ、紹介されました。



2. 今後の展望

今年度は、新型コロナウイルスの影響により、様々な活動が大きな制約を受けることとなりました。研修の受け入れやモデルツアーの開催が制限を受け、自主的なモデルツアーの開催は自粛することとなりました。総会是对面を避け、書面決議とし、体制づくり検討会も回数を減らすなどしたために、どうしても活動は停滞せざるを得ませんでした。

しかし、そういった中でも、できることを取り組み、ウィズコロナの環境学習の取り組みとして、まずはオンライン体制の整備を進めました。その結果、水島学講座「歴史編」では、地域内だけではなく、普段は直接参加できないような方の参加を得ることができました。また、高校生流域交流会への協力では、高梁川流域をフィールドとして、上流域の油木高校（神石高原町）と下流域の高校を結ぶことができ、今後の高梁川流域での若者の学びの支援・人材育成に大きな可能性を感じられるものとなりました。

地域間の移動が困難となる中で、改めて地元を見直す動きがあり、岡山大学に留学し、岡山県に移住している JICA 研修生のフィールドワーク受け入れや、県内の岡山城東高校による修学旅行の代替としての研修受け入れを実施することができました。地元で育つ若者が地域に関心を持つことは、郷土愛を育む第一歩であり、これを契機に、さらに地元を学ぶ取り組みの広がりにつなげていきたいと思っています。

昨年立ち上げられた「ミズシマ・パークマネジメント・Lab」と連携した「Park(ing)Day 倉敷」は、高校生や大学生にとって貴重な学びの場ともなっており、今後も継続されていくことを期待すると共に、さらに連携を深めることで、地域づくりの実践的な学びの場を確立していきたいと思っています。

倉敷古城池高校のアクティブラーニングと連携した取り組みもさらに深化しており、高梁川と海とのつながりを学んだ通生海岸での調査活動は、体験活動プログラムの充実につながりました。コロナ禍の中で生徒たちがいろいろ工夫して取り組んだ成果を報告したシンポジウムでは、高校生たちのさらに成長した姿を見ることができました。

また、ホームページを整備し、情報発信の体制を整えました。

今後、これらの成果を活かしてさらに発展させるためには、企業や若者を含めた高梁川流域内の連携を進めていくことが重要です。そこで、地域内における各セクターの SDGs の浸透度を測るためのアンケート調査を実施し、コンソーシアムの事業展開に反映させていきたいと考えています。そのうえで、企業の SDGs の取り組みを高校生・大学生などの若者がヒアリングをする取り組みや、地域内の様々なセクターの人が自由に意見交流のできる「地域サロン」の取り組みなどを新たに進めていきます。

引き続き、オンラインの体制を活かしつつ、古城池高校や地域と連携した取り組みを進めていきます。さらに、新型コロナウイルスの感染状況を注視しながら、視察研修の受け入れやモデルツアーを再開し、若者の学びを地域で支援する仕組みづくりを継続することで、持続可能な社会づくりを担う若者が育つ地域としての価値を高めていきたいと思っています。

これらの活動を通じて、地域の人々が、水島の価値を再認識しながら、学びを軸に地域の活性化とまちづくりが広がっていくように取り組みを進めていきます。

資料 みずしま滞在型環境学習コンソーシアムについて

目的

高梁川流域において、持続可能な地域づくりを担う人材を育成する

- ・ 今後ますます増加が見込まれる ASEAN・中国等からの留学生の学びのフィールド
- ・ 地域で生まれ育つ子どもが、地域の自然・文化・暮らしに触れ、地域への愛着を持つ

⇒ 地域社会の持続可能性の発見

⇒ 地域を愛し、地域に根付く人材を育成

G7 倉敷教育大臣会合「倉敷宣言」の具現化

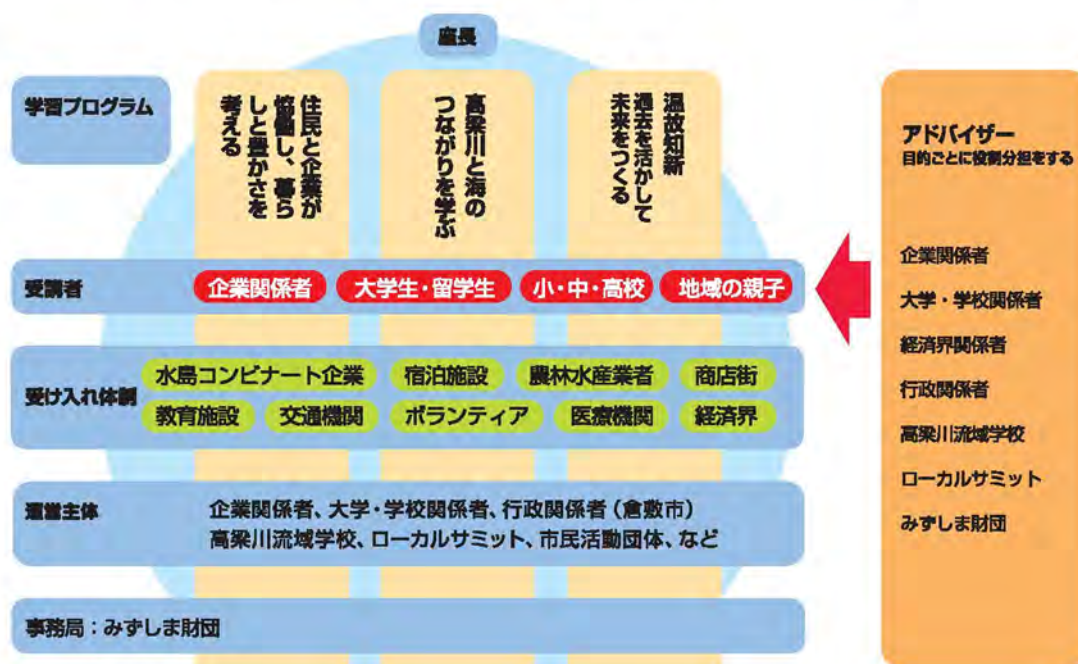
2030 年に向けて世界が合意した「持続可能な開発目標（SDGs）」との関連

経済成長・社会的包摂・環境保護の 3 つの主要素の調和

イノベーション創出と暮らしや自然環境が調和する未来社会の実現に向けた英知と努力を世界の人々が学ぶ。高梁川流域と瀬戸内海の自然、文化、暮らしに直接触れる滞在体験型学習を通じて地域社会の持続可能性を発見。未来を担う若者たちの思いを込めた流域のビジョンづくり。

組織体制

みずしま滞在型環境学習コンソーシアム



委員名簿（順不同）

- ・萩原邦章（会長） 萩原工業（株）代表取締役会長、（一社）岡山経済同友会 顧問
- ・伊東香織 倉敷市 市長
- ・井上峰一 倉敷商工会議所会頭・株式会社いのうえ 代表取締役社長
学校法人 関西学園 関西高等学校 理事長
- ・大久保憲作（監事） （一社）高梁川流域学校 代表理事、倉敷木材（株） 代表取締役会長
（株）FM くらしき代表取締役社長
- ・梶谷俊介（監事） ローカルサミット in 倉敷 実行委員長
岡山商工会議所 副会頭、岡山トヨタ（株） 代表取締役社長
- ・槇野博史 岡山大学 学長
- ・岡浩二 水島の未来を考える会 会長
- ・尾崎浩子 水島おかみさん会 会長
- ・古川明（副会長） （一社）高梁川流域学校理事、日本ケミカル機器（株） 顧問
おひさまエナジーステーション（株） 顧問
- ・高橋香代 岡山大学専任理事（おかやま地域発展協議体委員長）

（企画・運営事務局）

- ・吉田淳一 萩原工業（株）取締役執行役員事業支援部門長兼総務部長
- ・坂本万明 倉敷商工会議所 倉敷未来プロジェクト 委員
- ・土井春美 倉敷市経営企画部倉敷移住定住推進室 室長
- ・三村聡 岡山大学 地域総合研究センター センター長・教授
- ・福田憲一 （公財）みずしま財団 副理事長
- ・藤原園子 （公財）みずしま財団 事務局長
- ・塩飽敏史 （公財）みずしま財団 理事・研究員、（一社）高梁川流域学校監事

2018 年 3 月時点

みずしま滞在型環境学習コンソーシアム活動報告書

2020 年度

発行日：2021 年 3 月

発行者：みずしま滞在型環境学習コンソーシアム

事務局：公益財団法人水島地域環境再生財団（みずしま財団）

連絡先：〒712-8034 岡山県倉敷市水島西栄町 13-23

T E L：086-440-0121 F A X：086-446-4620

E-mail：webmaster@mizushima-f.or.jp

